

"音声重視の指導" による学校種間連携
～言語活動の3ステップメソッドを通して～

Using the 3-Step (EDP) Method for Introduction
of Activities to Achieve "Sound-Oriented Instruction"
for English Education in Japan

Satoshi Tsuha

津 波 聡

Abstract

This paper approaches "sound-oriented instruction" of English to be used for integrating language instruction through all grade levels (primary, secondary, and higher education). Introduced here is the 3-Step (EDP) Method for structuring the presentation of language-instructional activities. The method has undergone preliminary confirmation through some empirical studies of elementary, junior-high, and college settings, as reported here. First considered, however, are issues of effective integration of language instruction over a spread of different levels and capabilities of the students.

1 はじめに

国際化の到来により英語教育の目標はコミュニケーション能力の育成にシフトしたが、日本国内では、実際にはかなり前から取り組まれている課題である。1930年代に全国各地で試みられたオーラルメソッド、第二次大戦後のオーラルアプローチ、更に1970年代以降では、JETプログラムによる外国人指導助手（ALT）の公立学校への派遣、「総合的な学習の時間」の開設に伴う小学校英語活動の導入等、実践的な英語力の育成に向けた取り組みはこれまで数多く試みられた。

長年にわたる絶え間ない努力により、指導内容、指導形態、指導方法は一昔前に比べかなり様変わりし、ある程度の成果を挙げているはずである。しかし、英語教育に対する評価はまだまだ低く、国が示した「英語科使える日本人の育成」（文部科学省、2003）にはほど遠いというのが大半の見方である。

従って今後の英語教育は、留学や海外研修などの機会に恵まれた限られた人だけでなく、多くの国民が諸外国の人々と自由に意思の疎通ができるようになるような指導を目指さなくてはならない。そのためには、日常生活でほとんど英語を使う機会のない大多数の学習者に対し、授業の中で英語に触れる機会を最大限創り出していかなければならない。しかし、英語の授業時数を極端に増やすことはカリキュラム編成上困難であるため、小学校から高等学校、ひいては大学までの英語指導を一本化し、統一した目標を長いスパンで育成していくことがより現実的な方策であろう。そのためには、小・中・高、大の学校種間連携が前提条件となってくる。

このような状況の中、コミュニケーション能力の育成の新たな切り札として小学校英語の必修化が目前に迫っている。これまで、学校の実態に合わせ取り組まれ、学校間格差が問題となっていた小学校英語が、週1回の割合で年間35時間5、6学年に外国語活動として一律に実施されることになる。この改訂が意味することは、長期的、継続的指導の実現化へ向け絶好の機会が到来したということである。小学校英語の導入に際しては、小学校と中学校以降の英語教育との連携が大きな課題として取り上げられてきたが、小学校英語の足並みがそろうことで、これまで中・高においてそれぞれ3年単位で独立していた指導期間を小学校の

2カ年と有機的に融合させ、より長期的な指導期間を実現できる機会が与えられるわけである。従って、具体的且つ実効性のある学校種間連携方法の策定は、急務な課題として捉えなければならない。

筆者は、英語教師として中学校で勤務していた頃に、出来るだけ英語のインプットを確保するための方策として全ての言語活動を説明（Explanation）、デモンストレーション（Demonstration）、練習（Practice）の3つのステップを活用しながら英語で導入する方法（本稿では3ステップメソッドと表現する）を開発し実践した。その後、小学校、大学英語にも関わる機会があったことから小・中・大の授業で3ステップメソッドを実践することが出来た。本稿では、この3つの実践の成果を検証し、学校種間連携の具体例としての3ステップメソッドの可能性を論じると共にその導入法を提案する。

2 背景

英語教育の学校種間連携の重要性は、現行の学習指導要領により可能になった小学校英語の開始とともに更に強調されてきた。それは、文部科学省が統括する研究開発学校の指定方法にも反映されており、平成4年に開始された小学校英語研究開発学校は、当初単一の小学校を指定する単独校指定が主流であったが、現行の学習指導要領の本格実施以、徐々に小・中学校同時指定に移行し、小・中連携の研究、実践を奨励してきた（松川、大下、2007）。平成15年度に那覇市が指定を受けた研究開発学校は、市内の全小・中学校を対象にした全国初の地域指定として注目を集めた。その後、小・中連携研究を前提とした地域指定も拡大し、平成19年度に沖縄県内では二例目となる地域指定を南城市が受けている。

では、小・中連携とは何であろうか。木塚（2008）は、小・中連携の3つの要素として①教育内容、②カリキュラム（教育課程）、③教育方法（指導方法）（p.5）を挙げ、これらの要素が小学校から中学校へ継続されることが連携の条件だとしている。小・中連携の具体策として景浦（2007）は、まず小・中の教員がお互いの授業を参観し合い、それぞれの指導目標・内容・方法について理解を深めることが連携の第一歩となるとし、それを通して言語材料を整理するとともに音声指導の継続化を図ることが重要だと主張している。大城・直山（2010）は、交流には小・中教師交流、児童・生徒交流、小学校教師・生徒交流、中学校教師・児童交流の4種類の交流があると述べている。また、連携には小・中の情報交換、交流が前提になり、連携に必要な要素として、目標の一貫性、学習内容の系統性、指導法の継続性を挙げている。直山（2010）は、学習内容の系統化の具体策の一つとして小学校5、6年に配布される「英語ノート」の中学校での再利用を提案している。

上記のような連携要素は、既に様々な学校の実践に取り入れられ、研究報告書や関連著書にまとめられている。松川、大城（2007）は、小・中の授業参観、小・中及び行政・学校間の情報交換を円滑に実施するための行政主導の組織作りを紹介している。小・中一貫カリキュラムの作成による小・中連携については、高橋（2010）が、神奈川県南足柄市の実践を報告している。その他、松川、大下（2007）は小・中連携を意識した言語活動を取り入れた様々

な実践例を紹介している。

このように、研究開発学校や各地区の指定研究等により、拠点校を中心に小・中連携に対する意識改革は徐々に広がりを見せている。現状では、小・中連携の実践はまだまだ拠点校や拠点地域の取り組みに限られているようであるが（松川、大下、2007）、今後はこれまでの取り組みを基盤に実践校の拡大が図られるであろう。そのためには、研究指定校や指定地域以外の学校や校区に対しても行政側の積極的なイニシアチブが不可欠になるであろう（景浦、2007）。

一方で、多忙を極める学校現場の現実的な側面や、小・中の連携から小・中・高・大への連携拡大を考えた場合、学校単位または個々の教師の実践で実現可能な実効性のある連携方法の開発も早急に取り組まなければならない課題である。そのためには、まず小学校から大学までの英語指導における共通項を見出さなければならないが、木塚（2008）と大城、直山（2010）の主張する「指導法の連携」が最も現実的な方法ではないかと思われる。しかし、指導法といっても多岐に渡るため、より具体的且つ実現可能な提案が必要である。景浦（2007）は小学校英語活動のキーワードの一つである「音声重視した指導」の中学校以降への継続を挙げている。「音声重視した指導」の定義も様々な解釈が可能であるため、それを更にダウンサイズし、学校種間連携においてはそれを「出来るだけ英語を使用する指導」と定義し、その指導法を小学校から大学まで継続することにより、フィールドの違う各学校種を有機的に連携させ、長期的な指導スパンの実現が理論上図れることになる。

ところが、津波（2009）の6名の教育実習生を対象にした研究授業の調査では、「できるだけ英語を使用する指導」は実際にはかなり困難であることが明らかになっている。この調査では、教師の英語力と教師の英語使用観が十分なインプット量確保の絶対条件であるとしながらも、それ以外に克服しなければならない様々な障壁が指摘されている。その中でも、学習者の言語レベル・学習意欲・指導内容に対応した理解可能な英語の使用と、日本語使用後のコードスイッチ技術が大きな課題として挙げられている。実際に被験者の授業では、一端日本語を使用した後は、なかなか思考回路を英語に戻すことが出来ず、英語使用が徐々に減少し後半はほぼ日本語のみで授業が行われるという顕著な傾向がみられた。その他、日本語を使用した後の特徴として、容易な表現も日本語を使用するようになる、英語を使用しても無意識に日本語を補足し、インプットとして機能しない英語の使用となる等が挙げられている。

このような状況を背景に、全てのレベルにおいて言語活動を英語で導入する3ステップメソッドが学校種間連携の具体策になり得るかを探るべく、筆者が関わった小学校、中学校、大学での3ステップメソッド実践の成果を検証した。

3 スリーステップメソッドのねらい及び方法

図1に示すように、3ステップメソッドは、授業で扱う全ての言語活動や課題を3段階に分けて英語で導入するという方法である。この導入法の最大のねらいは、学習者のリスニン

グ力の強化であるが、導入のプロセスで行われる教師・生徒間、生徒間のコミュニケーションにより、スピーキング力、方略的ストラテジーの育成も副次的なねらいとなる。

第1ステップでは、まず次の活動についてアナウンスをした後に視覚教材等を使いながら英語で内容の説明を行う。その後、学習者の理解度をチェックし、十分理解できていると判断できる場合は即活動をスタートし、不十分であれば、第2ステップに移る。第2ステップでは、教師が実際に活動内容を実演しながら第1ステップと同じ英語表現を使用しながら説明する。第2ステップ後も理解度をチェックし、不十分であれば第3ステップに進む。第3ステップでは、学習者に活動や課題の一部を練習させ、活動内容が十分に理解されていることを確認してからスタートの合図を出す。

従って、必ずしも毎回3つのステップを利用するということではなく、活動内容の難易度が低い場合や日常活動の場合は1つ又は2つのステップで活動開始ということもある。更に、第2、第3ステップを状況によって入れ替えることも可能である。しかし、重要なことは常に第1ステップからスタートすることである。英語で活動を導入する最大の目的は聴解力の強化であるため、まずは英語で理解する機会を与えなければならない。これまでに参観した授業では、デモンストレーションによって活動内容を説明する場面によく遭遇したが、それでは学習者が何によって活動内容を理解したか判断が出来ない。

(第1) Explanation → Check → Start

↘ (第2) Demonstration → Check → Start

↘

(第3) Practice → Check → Start

図1 スリーステップメソッド (The 3-Step Method)

4 スリーステップメソッドの検証

筆者は現職に至るまでに、中学校教師、指導主事、大学非常勤講師の経験があることから、実際に3ステップメソッドを小学校、中学校、大学の授業に導入する機会があった。導入に当たっては、授業に取り入れる言語活動や課題を継続的に英語で導入することにより、学習者の聴解力が改善されるだろうという仮説を立て、一定の指導期間の前後に実施したリスニングテストの得点の推移と、アンケート調査結果によって指導効果を検証した。

(1) 小学校の実践及び検証結果

平成14年度に那覇市が「総合的な学習の時間」を利用して市内全小学校（3学年以上）で週1時間（年間35時間）の英語活動を開始したことを受け、当時指導主事として市内の小・中学校の英語教育を担当していた筆者は、以下の条件の条件を満たしている学校の3学年全児童（167名）を検証対象として抽出した。

ア) 学級担任と英語指導員が役割を分担したティームティーチングが成立している

- イ) クラスルームイングリッシュを多用している
- ウ) 英語指導員が3ステップメソッドで言語活動を導入している
- エ) 言語活動導入の際、学級担任が日本語に訳していない

同学年が英語活動を5～7時間経験した平成14年6月に、筆者が作成したクラスルームイングリッシュに関する20題のリスニングテスト（資料1参照）をプレテストとして実施し、更に約20時間経験した平成14年12月に同一のテストをポストテストとして実施した。同一のテストを使用するということで、プレテスト終了後には、問題用紙も回収した。

リスニングテストの結果（表1）は、プレテストの正答率が45%、ポストテストの正答率が61%であった。これらの数値は一見低いように思われるが、プレ・ポストテストの間には16ポイントの伸びが見られ、2つの母平均はt検定においても有意差を示した（プレテスト又はポストテストのどちらかが不参加になっている児童を特定できなかったために対応のない独立したサンプルのt検定を使用）。全く英語活動の経験のない児童が、半年間に約6割のクラスルームイングリッシュを理解できるようになったのは大きな成果と捉えることができるのではないだろうか。

この結果は、小学校英語の初年度では、授業をすべて英語で行うことは実質不可能であるものの、言語活動の中だけに英語使用を限定するのではなく、言語活動導入時に英語のインプットを与えることによって着実にリスニング力を向上させることができることを示唆しているのではないだろうか。実際に、対象の学年を指導した学級担任と日本人英語指導員（バイリンガル）は、アクティビティの導入時には英語のみを使用していたが、それ以外の場面では日本語も有効に使用していた。特に、英語活動開始時期には、日本語を有効に使用しながらクラスルームイングリッシュの意味を理解してもらい、指示通りに反応できるような練習を意識的に取り入れていた。

表1 小学校英語プレ・ポストテスト

	N	Mean	SD
プレ（6月）	167	8.98（45%）	2.65
ポスト（12月）	167	12.2（61%）	3.13

$$t = -10.160 \quad **p = .000 < .001$$

(2) 中学校の実践及び検証結果

筆者は、平成16年度に那覇市内の中学校に勤務していたが、その年担当した1学年の2クラスで3ステップメソッドを実践した。この導入法の聴解力に及ぼす効果を検証するために、平成16年4月にプレテスト、平成16年12月にポストテストを1学年全4クラス（149名）で実施し、筆者が担当した2クラスを実験群（76名）、他の教師が担当した2クラス（73名）を統制群とし、テスト結果を分析した。尚、統制群の2クラスでは3ステップメソッドを採用せずに、日本語と英語で授業が行われていた。また、プレテスト、ポストテストについては、

それぞれ平成15年度第1回英検5級テスト、平成15年度第2回英検5級テストのリスニング問題を活用した。

データ分析に当たっては、プレ・ポストテストの採点后、まず実験群で2つのテストを受験した76名の得点平均値を対応のあるサンプルのt検定を行った。次に実験群の76名のテスト結果と統制群で2つのテストを受験した73名のテスト結果を分散分析と多重比較を行った。

その結果、表2が示すように、実験群のプレテストの正答率は57.8%であったが、ポストテストでは、73.1%となり、約12ポイントの伸びが見られ、t検定においても2つの母数間に有意差が見られた。実験群、統制群の比較では、表3が示すようにどちらもポストテストに伸びが見られ、有意差もあった。ところが、プレテストの時点では実験群が57.8%、統制群が62.0%で4.2ポイント統制群が上回っていたが、ポストテストでは実験群が73.1%、統制群が71.1%となり、実験群が逆に2.0ポイント統制群を上回っている。プレテスト、ポストテストのいずれのテストでも実験群・統制群間の有意差は見られないものの（表4）、実験群が統制群よりより顕著な伸びを示している（グラフ1）。3ステップメソッドがポストテストの伸びの直接的な要因となっているという判断は慎重を期さなければならないが、実験群が統制群より顕著な伸びを示したことは、その有効性を示唆していると捉えることができる。

対象となった1学年の生徒は小学校5年生より英語活動を経験していたが、中学校の授業では、文法事項の説明や教科書の内容確認、文化的背景の説明がある上、小学校英語とは異なり正確さが要求されることから、統制群の授業同様、筆者の授業においても必要に応じて日本語を使用した。しかし、言語活動の導入の際には、必ず英語のフィルターを通して活動に入らせることによって、毎時間英語のインプットを確実に供給することができた。この点においても、3ステップメソッドは、教師の英語使用量を確保し、中学生の聴解力促進を図る上で有効であると判断できる。

表2 中学校英語プレ・ポストテスト

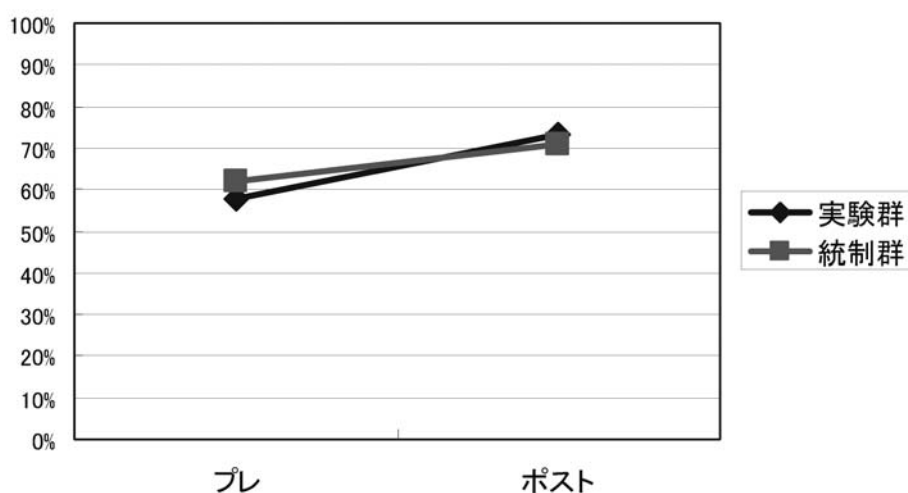
	N	Mean	SD
プレ	76	14.5 (57.8%)	3.90
ポスト	76	18.3 (73.1%)	3.87
$t = -10.253 \quad **p = .000 < .001$			

表3 中学校英語プレ・ポストテスト実験群・統制群比較

	N	Mean	SD
実験群プレ	76	14.5 (57.8%)	3.90
実験群ポスト	76	18.3 (73.1%)	3.87
統制群プレ	73	15.5 (62.0%)	4.08
統制群ポスト	73	16.5 (71.1%)	3.81

表 4 中学校英語プレ・ポストテスト実験群・統制群多重比較

(I) グループ	(J) グループ	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率	95% 信頼区間	
					上限	下限
実験群プレ	実験群	-3.81579(*)	.63504	.000	-5.5026	-2.1290
	統制群プレ	-1.03262	.64153	.651	-2.7367	.6714
	統制群ポスト	-3.30660(*)	.64153	.000	-5.0106	-1.6025
実験群ポスト	実験群プレ	3.81579(*)	.63504	.000	2.1290	5.5026
	統制群プレ	2.78317(*)	.64153	.000	1.0791	4.4872
	統制群ポスト	.50919	.64153	1.000	-1.1949	2.2132
統制群プレ	実験群プレ	1.03262	.64153	.651	-.6714	2.7367
	実験群	-2.78317(*)	.64153	.000	-4.4872	-1.0791
	統制群ポスト	-2.27397(*)	.64796	.003	-3.9951	-.5529
統制群ポスト	実験群プレ	3.30660(*)	.64153	.000	1.6025	5.0106
	実験群	-.50919	.64153	1.000	-2.2132	1.1949
	統制群プレ	2.27397(*)	.64796	.003	.5529	3.9951



グラフ 1 中学校プレ・ポストテスト比較

(3) 大学の実践及び検証結果

筆者は平成14年度から17年度までの5年間沖縄県内の大学で夜間主の学生を対象にした英語Ⅰ・Ⅱを担当したが、本稿では、平成15年度の夜間主経済学専攻の1年次対象の英語Ⅰ・Ⅱの実践と検証結果を紹介する。

本科目の登録人数は31名でその殆どが英語に苦手意識を持ち、語学レベルは概ね英検3級程度であった。また、中学校、高等学校で英語による授業を経験している学生は一人もいなかった。授業では、各章がリスニング、スピーキング、リーディング、ライティングの4領域で構成されている指定の教科書を使用した。学生の語学レベル、学習歴を考慮して日本語

を適宜使用したが、言語活動の導入は3ステップメソッドを使用しながらすべて英語で行った。

実践の成果を検証するために、後期（英語Ⅱ）の開始直後、平成15年10月にプレテスト（平成14年度第1回英検3級リスニング問題を使用）、平成16年2月にポストテスト（平成14年度第2回英検3級リスニング問題を使用）を実施し、両テストを受験した21名の得点の推移を分析した。また、学生の視点から実践を検証するために、学期末に実施される学生による授業評価の中から本実践に関連する項目も活用した。

検証の結果、プレ・ポストテスト間には7.6ポイントの伸びがみられ、t検定においても.05の有意水準内で有意差を示した（表5）。授業評価アンケート（表6）を見ると、「この科目で十分な知識、技能が習得できた」と感じた学生は61.5%（項目13）であった。極めて高い数値とはいえないが、クラスの大半が英語に対して苦手意識を持ってスタートした（項目5）ことを考慮すると評価に値するのではないだろうか。また、英語のみを使用して言語活動や課題を導入しても学生の理解には特に支障はないことがわかった（項目15、20）。

このような結果は、3ステップメソッドが大学のレベルにおいても一定の英語インプットを確保し、学習者の聴解力改善に有益であることを示唆するものであった。理解力の向上は、英語に対する自信、興味・関心の高揚に繋がり、それが学習意欲を向上させるという二重、三重の効果が期待できる。実際、この科目を受講して英語に対する興味が高まり、次年度に英語科への編入を決意したという学生もいた。

表5 大学英語プレ・ポストテスト

	N	Mean	SD
プレ	21	23.4 (78.1%)	3.63
ポスト	21	25.7 (85.7%)	3.82
$t = -2.759 \quad *p = .012 < .05$			

表6 大学生授業評価アンケート

項目	質 問	1 又は 2 の回答率
5	登録前にこの科目についての十分な知識、技能があった。	26.9%
13	この科目で十分な知識、技能を習得できた。	61.5%
15	授業者の説明は十分理解できた。	73.1%
20	授業の進め方は妥当であった。	84.6%

1. そう思う 2. どちらかというと思う 3. どちらかというと思わない 4. そう思う

5 スリーステップメソッドの導入法

小・中・大での実践と検証結果により、3ステップメソッドが各学校種で導入が可能であるということと、聴解力改善への期待ができることが示されたが、この方法が授業内で効果

を発揮するには当然のことながら準備と技術が要求される。以下に、3 ステップメソッドの適用について具体的に説明する。

(1) 第1ステップ

学習者が活動や課題の内容を英語で理解するという段階で、学習者にとっては最も難易度の高い導入方となる。このステップで活動や課題が開始できることが理想であるが、活動や課題の頻度、内容の複雑さ、学習者の言語レベルによっては、リーディング活動における pre-reading 活動のような役割を果たすことになる。つまり、教師は、学習者の実態を十分把握した上で、単に英語を話すだけでなく、必要に応じ①写真、イラスト、実物等の視覚教材の使用、②語彙や表現の精選、③スピード、抑揚の調整、④生徒への発問、⑤説明順序の工夫等、学習者のリスニング意欲を喚起し、理解を助けるような工夫が必要となる。

その中でも特に重要なのは、説明の順序である。筆者の授業者及び授業参観者としての経験から、学習者が教師の説明を理解できないのは、英語そのものに原因があるのではなく、説明の系統性にある場合が多い。英語による説明においては、使用する語彙や表現に注意を払うことも重要であるが、シリーズメソッドのように、学習者の立場に立ち、活動がスタートして終了するまでのプロセスを時系列で説明することを念頭に置かなければならない。

(2) 第2ステップ

第1ステップでの英語による説明の後、学習者の理解度を確認し、不十分であれば、活動のデモンストレーションを行い、英語だけでなく、動作をヒントに説明内容の理解を図る。デモンストレーションは、教師が単独で行う方法もあるが、指導形態や活動によっては、ALTや生徒を使うことも考えられる。この段階で重要なのは、デモンストレーション（動作）が主にならないということである。つまり、動作はあくまでも英語理解の補助となるよう取り入れることから、できるだけ第1ステージの説明を再度聞かせながら、動作を交えるということが重要となる。

(3) 第3ステップ

第2ステージ終了後、再び学習者の理解度を確認する。不十分であれば、実際に活動の一部を練習させる。第2ステージ同様、活動内容や指導形態により、練習の種類、量、形態は異なるが、学習者がこの最終段階で活動内容をきちんと把握し、安心して活動に入れるよう十分な練習を提供することが重要となる。活動を見切り発信してしまい、開始後に何度も活動を中断しては説明を補足するという事態は避けたい。一部の学習者に急かされたり、時間配分が気になる場合でも、学習者の理解度をきちんと確認することが円滑な活動展開への条件となる。

(4) 留意点

導入部分という短い時間帯ではあるものの、この部分を全て英語で行うことは、学習者にとっては精神的な不安や苦痛を与える時間になりかねない。この時間帯が、教師の英語回路復活への関所となるだけでなく、学習者にとっても魅力的な問題解決の場面となるためには、教師の仕掛けが必要となる。この導入法を有効にする手だてとして3つの仕掛けを以下に示す。

①オリエンテーション

3ステップメソッドの前提条件となるのが、学習者の聞く姿勢であることから、学習者の意識改革や教室内の雰囲気作りは不可欠となる。そのための方策として、オリエンテーションの開催を挙げる。オリエンテーションでは、教師の英語使用について説明し、学習者には英語を強要しない、学習者同士の相談を奨励することを周知する。また、リスニングに対する心構えやコツについても詳述する。リスニングについては、一字一句全てを理解する必要はなく、内容の大意を捉えるだけでいいことを強調する。具体的にはTerrell (1982) の主張する、1) 文脈、2) ジェスチャーや動作、3) 背景知識 (p.124) の利用を奨励する。更に、聞いた内容については、友だちと日本語で確認ができることや、友だちの発言や発音は絶対に嘲笑しないという教室ルール周知徹底を図ることも重要である。

中学校・高等学校の英語教師であれば、英語教科に特化することなく、学校教育全般を通して、教師と児童・生徒、児童同士、生徒同士の望ましい人間関係を構築し、コミュニケーションに対する意識改革と雰囲気作りを図りたい。特に、コミュニケーション能力の育成を指導目標の最上段に掲げる中・高英語教師の取り組みは、他教科の教師の模範となるような実践でありたい。学級経営、総合的な学習の時間、部活動指導等の日本語による話し合い活動は英語教師の専門性が特に発揮できる場面ではないかと考える。

殆ど全ての授業を担当し、常に児童と接している小学校教諭は、その点においては更に秀でているのではないかとと思われる。小学校教諭の場合は、先生は授業推進者、英語学習者のモデルであるということを児童に周知させながら、一緒になって積極的に英語を理解するという雰囲気作りに努めたい。

②日本語使用

Krashen (1993) は、学習者の精神的負担軽減や背景知識の構築のために、特に初心者に対する母語の使用の重要性を主張しているが、3ステップメソッドにおいても、英語使用は活動の導入部分に限られ、活動の展開中やその他の場面では必要に応じ日本語が使用されることになる。又、導入部分においても文字による日本語は有効に活用される。例えば、ワークシートを使用してのインターアクションゲームを導入する場合、ゲームの内容やルールを日本語でワークシートに箇条書きすれば、学習者は教師の説明を英語で聞いた後、ワークシートでその内容を確認するということになる。その際留意したいのは、ワークシートの配布は

説明の後に行うということと、日本語説明の記載は必要に応じて行うことを原則とすることである。毎回、プリントに日本語の説明があると学習者は口頭による説明ではなく、活字の説明を待つようになるからである。

小学校の場合は、初めて英語に触れる児童に対して英語のみで授業を行うのは不可能であるばかりか逆に弊害が懸念される。従って、新学期の英語活動はしばらく日本語を交えながらクラスでよく使用するクラスルームイングリッシュを集中して取り上げ、基本的な表現が理解できるように慣らしていくことが望ましい。既に年間計画が作成されている、或いは小学校英語の目標は技能面ではなく、関心・意欲・態度の滋養であるというような理由で、新学期開始からトップギアで計画通りに開始するよりは、クラスルームイングリッシュに特化した授業内容を一定期間提供することが長期的にはより効率的であり、連携の近道となる。

また、初年度の英語活動においては、活動の導入場面においても日本語を臨機応変に使用していく必要がある。ここで留意したいことは、クラスルームイングリッシュの練習と並行しながら活動開始当初はできるだけ平易な英語表現で導入できるよう活動をデザインする等、英語のみの説明に段階的に移行できるように工夫することである。更に、学級担任は、英語指導員の説明を丸ごと日本語に訳すことは避けたい。前述のように、一端説明を日本語に訳すと、児童は英語ではなく、その後の日本語訳を待つようになってしまう。そうなってしまうと、英語で授業を行う意義を失ってしまうことになる。

③理解可能なインプット

教師から発せられる英語は、学習者にとって理解可能なレベルでなければならないが、インプット供給の前に重要なことは、まず聞く体制を作ることである。①の雰囲気作りとも関連するが、活動の導入の際には学習者全員の聞く姿勢の確認が必要である。そのためにはまず、学習者の注意力が教師以外に向かないよう彼らの手元に何も置かない工夫が必要である。従って、資料や教具の配布、学習形態の変更（ペアやグループ作り）は必ず説明が終わってから行う方が望ましい。前述したように、これまで数多くの研究授業を参観してきたが、教師が英語を話しているのにも関わらず生徒が聞いていないという場面に遭遇したことは少なくない。その原因として、生徒が配付資料を見ている、グループ学習のため生徒が教師と正対していない等が挙げられる。

小学校においては、イス、机を使用せずに床に座するという形態がよく取り入れられる。このような状況では、児童が一定方向を向いていないため、説明の前に聞く姿勢を作らせることが特に重要になる。担任教師はこのような場面で持ち前の指導力を十分発揮し、児童の姿勢をしっかりと確認してから、英語指導員に繋ぎたい。

聞く姿勢が確立された後は、学習者の集中力が持続するようインプットを工夫しなければならない。まず簡潔な説明を心掛けるということと、前述のように、第1ステージにおいても学習者の実態に応じて視覚教材を駆使すると共に、スピード、語彙、文構造、説明内容、説明順等に注意を払い、学習者が終始インプットに食いついていけるようインプットを加工

しなければならない。

学習者の集中力持続には、更に双方向コミュニケーションが重要となる。教師が一方向的に説明するのではなく、発問を効果的に織り交ぜながら、学習者から答えを引き出し、参加させながら説明を進行するよう心掛けたい。発問の際に重要なことは、個別に質問するのではなく、学級全体に呼びかけるということである。特に、中学校・高等学校の新学期は生徒の多くが緊張状態にあるため、英語による個別の質問は英語アレルギーを作りかねない。教師は、発問をクラス全体に呼びかけ、生徒のかすかな反応を拾い上げるようにするだけでなく、全く反応がない場合でも、誰かが発言したように演ずることも時には必要となるであろう。

(4) 小学校英語活動への導入法

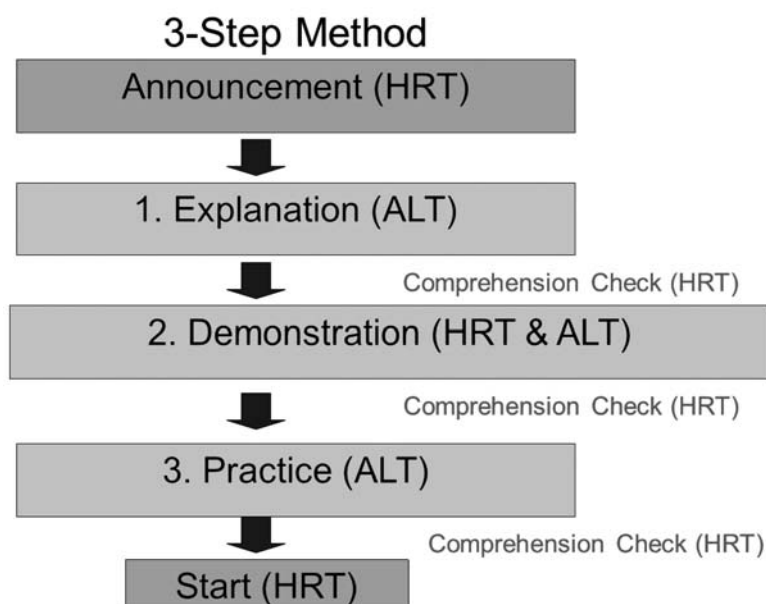


図2 小学校における3ステップメソッド

小学校英語では、図2のように3ステップメソッドは英語指導員が担当し、ステップごとの理解度チェックを学級担任が担うことになる。従って、3ステップメソッドは学級担任と英語指導員とのチームティーチングが前提条件となり、行政側がそれを保証してくれることを切に願うばかりである。

6 おわりに

コミュニケーション能力育成をより効果的に促進することを目的にして開発された言語活動は膨大な数に上るが、言語活動の導入方法については、これまであまり注目されてこなかった。教師の使用する英語の質的・量的研究と併せてこの方面の研究が急がれるところである。

2009年3月に告示された高等学校外国語の新学習指導要領案（第3款の4）に「授業は英語で行うことを基本とする」という表現が明記され、物議を醸し出しているが、教師の英語使用を all or nothing の視点で論じるよりも、日本のような EFL の環境ではできるだけ英語を使用するという柔軟な姿勢が重要になってくる。しかしながら、"できるだけ" という表現の曖昧さが、教師の英語使用量を抑制している要因にもなっていることから、特に経験の浅い時期は英語インプットを毎時間確実に供給できる工夫が必要になってくる。45分又は50分の授業に取り入れられる言語活動や課題の導入部分を教師の英語使用関所とすることにより毎時間一定量の英語インプットを学習者へ保証することができる。それはひいては、"音声を重視した指導" による学校種間連携にも繋がる。3ステップメソッドを小学校から継続することにより、新学習指導要領が目指すように高等学校の授業をすべて英語で行うことも不可能ではないと考える。

その点で、2011年に必修科されその後教科化に向かう可能性のある小学校英語は、指導者の確保が大きな課題となる。英語インプットの供給を専門外の学級担任に要求することは実質不可能であるため、教員の学校種間交流や小学校教員養成課程の検討が急がれる。当面は、新学習指導要領の中で謳われている "音声を重視した外国語活動" を実現するために学級担任と英語指導員のチームティーチングを行政側が保証してくることを期待したい。

参考文献

伊東嘉一（2000）「英語教育のすべて」大修館書店

石田雅近、緑川日出子、久村研、酒井志延、笹島茂（2004）平成15年度文部科学省初等中等教育局国際教育課委嘱研究「英語教育に関する研究」報告書

大城賢、直山木綿子（共編著）（2008）『小学校学習指導要領の解説と展開』（教育出版）

大城賢、松川禮子『小学校外国語活動実践マニュアル』（2008）（旺文社）

岡秀夫、金森強（編著）（2007）『小学校英語教育の進め方』（成美堂）

景浦攻（2007）『新しい時代の小学校英語指導の原則』（明治図書）

景浦攻、町川和子（著）『小学校英語の到達目標と指導のプロセス』（明治図書）

神林裕子、中村香恵子、中村邦彦、萬谷隆一（2010）「小学校教師と中学校教師の潜在的意識の違いの違い」『JASTEC研究紀要』29号、17-29

木塚雅貴（2008）『小・中連携を英語ではじめよう』（日本標準ブックレット）

高橋一幸（2010）「小中連携」大城賢、國方太司、高橋一幸、樋口忠彦『小学校英語教育の展開』10章（研究社）

津波聡（2009）「できる限り英語を使う授業は可能か」『沖縄国際大学外国語研究』第13巻1号、45-60

直山木綿子（2010）「豊かなコミュニケーション活動を通して」JASTEC 第18回九州沖縄支部研究大会基調講演

松川禮子、大下邦幸（編著）（2007）『小学校英語と中学校英語を結ぶ』（高陵社書店）

- ベネッセ教育研究開発センター (2009) 「第1回中学校英語に関する基本調査(教員調査)」
<http://www.cuc.ac.jp/~shien/terg/15ishoku.pdf#search='教員の英語使用'>
- 文部科学省 「英語教育改善実施状況調査結果概要」(中学校、高等学校)
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/001/060322/001.htm
- 文部科学省 「英語が使える日本人の育成のための行動計画」平成15年3月
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/15/03/03033102.pdf
- 文部科学省 「高等学校学習指導要領」平成21年3月
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/kou/kou.pdf
- Auerbach, E. R. (1993). Reexamining English only in the ESL classroom. *TESOL Quarterly*, 27(1), 9-32.
- Burden, P. (2002). The use of the students' mother tongue in monolingual English "conversation" classes at Japanese universities. *The Language Teacher*, 24(6), 5-10.
- Cameron, L. (2007). *Teaching Languages to Young Learners*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Duff, P & Polio, C. (1994). Teachers' language use in university foreign language classrooms: a qualitative analysis of English and target language alternation. *Modern Language Journal*. 78, 313-326
- Krashen, S. D. (1993). *The Power of Reading*. Inglewood Co.: Libraries Unlimited.
- Krashen, S. D. (1985). *Principles and Practice in Second Language Acquisition*. New York: Pergamon Press.
- Krashen, S. D., Terrell, T. D., Ehrman, M. E, and Herzog, M. (1984). A theoretical basis for teaching the receptive skills. *Foreign Language Annals*, 17(4), 261-275.
- Oyabu, K. (2007). Teaching English in English: A preliminary study into nonnative English-speaking teachers' decision in using English as the language instruction. *Forum of Language Instructors*, 1, pp. 26-36.
- Piasecka, K. (1988). The bilingual teacher in the ESL classroom. In S. Nicholls & E. Hoadley-Maidment (Eds.), *Current Issues in Teaching English as a Second Language to Adults* (pp.97-103). London: Edward Arnold.
- Pennington, M. (1995). Pattern and variation in use of two languages in the Hong Kong secondary English class. *RELC Journal*, 26(2), 80-105
- Terrell, T. D. (1982). The natural approach to language teaching: An update. *Modern Language Journal*. 66(2), 121-132.
- Terrell, T. D. (1986). Acquisition in the natural approach: The binding/access framework. *The Modern Language Journal*, 70(3), 213-227.
- Yukawa, E., Koyama, T., Takanashi, T. (2010). "What does Let's Talk tell us?" *JASTEC Journal*. 29. 1-16.

資料 1 平成 14 年度第 1 回小学校英語聞き取り検査スクリプト

Hello everyone. みなさん今日は英語聞き取り検査に協力してくれてありがとうございます。検査に入る前に少し説明がありますのでよく聞いてください。まず、この検査は日頃の英語活動で、みなさんがどれだけ英語になれているかをみるものです。これは学校のテストではありませんので、学校の成績とは全く関係ありません。また、みなさんの一人一人の名前や結果を他の人に教えることはありません。ですから心配せず、リラックスしてください。それから、検査を受ける時のお願いがあります。学級名、番号、名前を忘れずに記入してください。それから、検査が始まったら絶対におしゃべりをしたり、友達と相談したりしないでください。問題は全部で20問あり、すべて番号で答えることになっていますが、答えがわからないときは、勘を働かせて全部答えるようにしてください。英語を聞くとき、勘を働かせるということはとても大切なことなんです。最後に、検査が終了しても先生がみなさんの解答用紙を集めるまではおしゃべりをしないようにしてください。これで、この検査についての説明を終わります。何かわからないこと、質問があれば今先生に質問してください。なければ、検査を開始しますので準備をしてください。

では、これから英語聞き取り検査を始めます。問題は全部で20問あります。問題 1 から問題 3 は、まず日本語で質問が流れます。その質問の答えを(1)(2)(3)の英語から 1 つ選んでその番号を丸で囲んでください。質問英語とも 2 回ずつ流れます。回答時間は 5 秒です。では始めます。

問題 1 みなさんが誰かに初めてあったときに使う英語は次のうちどれですか。

- (1) Nice to meet you.
- (2) I'm fine, thank you.
- (3) See you again.

問題 2 相手にお礼を言われたときに使う英語は次のうちどれですか。

- (1) I'm sorry.
- (2) You're welcome
- (3) No, thank you.

問題 3 先生にもう一度言ってほしいときに使う英語は次のうちどれですか。

- (1) One more time, please.
- (2) Attention, please.
- (3) Sit down, please.

問題 4 から問題12までは先生がよく使う英語の質問が流れます。その質問が何を聞いているかを(1)(2)(3)の日本語から 1 つ選んで、その番号を丸で囲んで下さい。英語日本語ともに 2 回ずつ流れます。解答時間は 5 秒です。では始めます。

問題 4 How is the weather today?

- (1) 今日は何月何日かを聞いています。
- (2) 今日は元気ですかと聞いています。
- (3) 今日の天気を聞いています。

問題 5 What is this?

- (1) 名前を聞いています。
- (2) これは何かと聞いています。
- (3) 今日は何曜日かを聞いています。

問題 6 Do you understand?

- (1) わかりましたかと聞いています。
- (2) 質問があるかを聞いています。
- (3) 覚えていますかと聞いていますか。

問題 7 What day is it today?

- (1) 何が好きかを聞いています。
- (2) 今日は何時間授業があるかを聞いています。
- (3) 今日は何曜日かを聞いています。

問題 8 What's your name?

- (1) 番号が何番かを聞いています。
- (2) 名前を聞いています。
- (3) どこにすんでいるかを聞いています。

問題 9 Do you have any questions?

- (1) ペンを持っているかを聞いています。
- (2) 質問があるかを聞いています。
- (3) 忘れ物がないかを聞いています。

問題10 What time is it now?

- (1) 今何時間目かを聞いています。
- (2) いつ勉強しているかを聞いています。
- (3) 今何時かを聞いています。

問題11 What do you like to do today?

- (1) どこに行きたいかを聞いています。
- (2) 何が好きかを聞いています。
- (3) 何がしたいかを聞いています。

問題12 Where is your book?

- (1) どんな本を持っているかを聞いています。
- (2) 本読みをしたいかを聞いています。
- (3) 本がどこにあるかを聞いています。

問題13から問題20までは、先生がよく使う「何々してください」という意味の英語が流れます。何をしてくださいといっているのかを(1)(2)(3)の日本語から1つ選んでその番号を丸で囲んでください。英語日本語ともに2回ずつ流れます。解答時間は5秒です。
では始めます。

問題13 Repeat after me.

- (1) 先生に注目するように言っています。
- (2) 先生のまねをしてくださいと言っています。
- (3) 大きな声を出すように言っています。

問題14 Raise your hands.

- (1) 手をたたくように言っています。
- (2) 手を広げるように言っています。
- (3) 手を挙げるように言っています。

問題15 Let's sing a song together.

- (1) 一緒に歌を歌いましょうと言っています。
- (2) 一緒に楽しみましょうと言っています。
- (3) 一緒にゲームをしようと言っています。

問題16 Put your pencil down.

- (1) 鉛筆を出してくださいといっています。
- (2) ノーをきちんと書くように言っています。
- (3) 鉛筆を置いて下さいといっています。

問題17 Please stop and go back to your seat.

- (1) 活動をやめて席に戻るように言っています。
- (2) 活動をやめて席を元の位置に戻してくださいといっています。
- (3) 自分の席まで言って止まってくださいといっています。

問題18 Stand up and make groups.

- (1) グループは全員たつように言っています。
- (2) たったままでグループ活動をしてくださいといっています。
- (3) 席を立てグループを作ってくださいといっています。

問題19 Close the door, please.

- (1) ドアの方に近づいてくださいといっています。
- (2) ドアを開けて入ってくださいといっています。
- (3) ドアを閉めてくださいといっています。

問題20 Be quiet and listen carefully.

- (1) よく聞いてアルファベットを言ってくださいといっています。
- (2) 静かにしてしっかり聞くように言っています。
- (3) アルファベットをしっかり聞くように言っています。

これで聞き取り検査を終わります。ご協力ありがとうございました。先生が解答用紙を集めるまではもう少し静かにして下さい。